

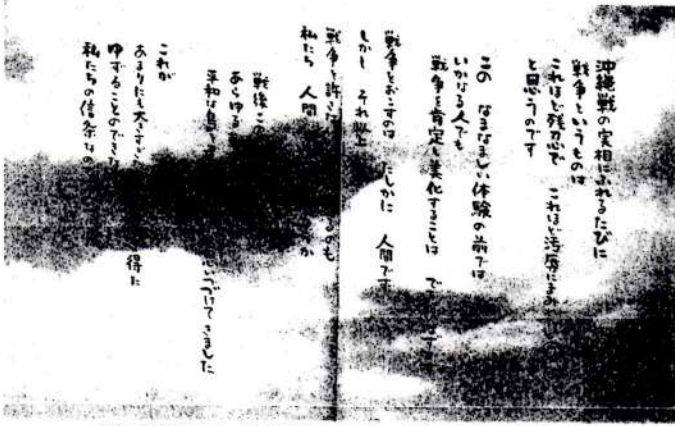
# 文化

## 沈黙に向き合う

沖縄戦聞き取り47年

石原 昌家

1999年8月から10月にかけて、沖縄の地元新聞『琉球新報』『沖縄タイムス』を中心に、新沖縄県平和祈念資料館の展示変更問題が連日報道されてい



「住民の視点」で1978年に再オープンした沖縄県立平和祈念資料館の「展示結びのことば」(沖縄県立平和祈念資料館ガイドブック『平和への証言』より)

(23)

### 平和祈念資料館

## 「証言の本」メインに

## 兵器の展示、住民視点で

定で「日本軍による住民殺害」の記述を、日本政府が削除した問題で県民世論が沸騰して以来のことであった。それで、日本政府も日本軍による住民殺害は、その記述を黙認せざるを得ないはず、全国的に共有された沖縄戦認識であった。

### 発想の大転換

沖縄県立平和祈念資料館展示改善作業と沖縄戦を考ふる会の活動とは、車の両輪のような働きをしていた。「考ふる会」は、発足1カ月後には63人が会員の登録をした。しかし、実際の具体的活動のメンバーは、「沖縄戦を考ふる会」が、1978年1月に発行

17日)で述べてきた。そこで困難に直面することになった。圧倒的勝ち戦をしていた米軍でさえ、「あの展示改善作業と沖縄戦を考ふる会の活動とは、車の両輪のような働きをしてい

た。この「展示改善作業と沖縄戦を考ふる会」の活動とは、車の両輪のような働きをしてい

た。1982年の教科書検定で「日本軍による住民殺害」の記述を、日本政府が削除した問題で県民世論が沸騰して以来のことであった。それで、日本政府も日本軍による住民殺害は、その記述を黙認せざるを得ないはず、全国的に共有された沖縄戦認識であった。

それは全国紙でも取り上げられたり、テレビ局などのメディアでも取り上げたりしていった。沖縄戦の史実をめぐる問題として県民世論が沸騰した。それは、1982年の教科書検

新資料館のガマ内展示と

1975年6月に開館した

住民の多くは、ガマ・壕

結びのことば

作業をつづけていった。こ

新資料館のガマ内展示と避難している幼子を抱く数々の住民に日本兵が銃剣を突きつけ、屋敷朝苗知事を知れぬように威嚇している史実に沿った模型から、県幹部の指示で勝手から、日本兵から銃を外して、手ぶらで立っている姿(横型)に変更していた。この沖縄戦の本質を歪曲する県

1975年6月に開館した「沖縄県立平和祈念資料館」は、その役割をまっく果たすものではないとい

「沖縄戦と平和教育」(沖教祖那覇支部と共著)の執筆者として名を連ねている中山良彦、安仁屋政昭、大城将保、久手敏憲、石原昌家、真栄里泰山の6人であった。この6人が展

る住民の多くは、ガマ・壕の中に潜んで生き延びてきた。そのひとたちの体験をどのように見せることがで

資料館のメインになる「証言の本」は、展示計画委員会では「沖縄県史」の

作業をつづけていった。この「展示改善作業と沖縄戦を考ふる会」の活動とは、車の両輪のような働きをしてい

(次回は23日掲載)